

どうしても、痛ましい事件やあってはならない不祥事、政治とカネの問題、事故、台風や集中豪雨、豪雪、噴火、地震などによる災害、急性ウイルス性感染症、そして、大規模な空爆や砲撃などによる子どもまで巻き添えにする世界各地の武力紛争が思い起こされます。

さらに、30年以上も前の記事を今に至って誤報と訂正した新聞に嘩然としました。と同時に、その誤報を激しく批判し、責任を追及する様々な「ジャーナリズム企業」の喧噪にも暗然としました。

さらにまた、今年には特に、子どもの生き方の「成長モデル」となるべき大人の人間の愚かさや浅ましさを、狡さを赤裸々にする事件が目立ちました。

人間には、「自分が、醜悪と恥じ、心の底に必死に抑え込んでいる欲望や感情を、ストレートに表出する人に嫌悪感を覚える。」という心理（投影）があるそうです。

これを言い換えますと、「自分が嫌いな人は、表現上の相違こそあれ、自分と同じ欲望や感情を持っており、本質的に自分とよく似ている。」という俄に認め難い心理です。

今年、このような心理を何度も体験し、次のような、己の醜悪な部分を直視せざるを得ない状況に陥り、その都度、やり切れない思いにかられました。

○どんなことがあっても、人前で泣くのはみっともないと考え、今までずっとそうしてきたが、かの県議が会見で号泣し続けた。泣くという人間の純粹で、崇高な行為を冒瀆するような浅ましい姿と、人に見せないように必死に抑えている自分の脆弱な部分が重なり、無性に腹が立った。

○辛くても、恥ずかしくても、自分に失敗や非があれば、正直に認め、潔く謝罪しようとして心に決め、あわよくば責任を逃れようとする自分の狡さを剥き出しにしないために、必死に頑張ってきた。しかし、東京都議会のセクハラやジは、結局、全容があいまいなまま幕引きになった。再三否定し、逃げ場を失ってからようやく名乗り出た都議と名乗り出なかつた都議(?)に、自分の狡猾な部分を見せつけられたような嫌悪感を抱いた。

○ともすると我欲や保身が優先しがちな自分を「恥」と考え、職務を誠実に果たし、自分の職責を全うしようと懸命に踏ん張ってきた。ところが、隣国の沈没した大型旅客船の船長が、高校生325人を含む乗客・乗員の救助活動をせず、パンツ姿で真っ先に脱出するテレビ画面に、自分の心の闇の奥底に蠢いている、見てはならない魍魎魍魎を見てしまったようなおぞましい衝

撃を受けた。「自分は違う。」と断言したいのだが、どうしても言い切れないのだ……。

○子どもは、地球の未来を築き、明日の世界を担う「地球市民」であり、子どもの小癩な部分に振り回されず、子どもを見下したり、軽んじたりしないように自戒している。そのため、子どもに起こっている問題はことごとく大人に起因しているにもかかわらず、大人の失態や愚かさを、「小学生でさえ分かる。」「集団的自衛権の問題は子どもに似ている。」「判断力は中学生以下だ。」などと、子どもの、子ども故の幼さや未熟さにたとえる輩にやり切れない怒りを抱いた。子どもに振り回されまいと心がけながらも、決してその通りにいかない自分のジレンマをあっけらかんと、いとも簡単に抉り出したからだ。

「それを言っちゃあ、お仕舞いよ。」

映画「男はつらいよ」(渥美清主演・山田洋次監督)の主人公、寅さんが、哀しみや怒りを堪え、しみじみと、噛みしめるように言う名台詞です。

この台詞は、たとえばどんなことがあっても、人間として、言ってはならないことや、やってはならないことがある、という寅さん一流の道徳観を端的に示していると思います。

前述の輩はこそぞって、狡猾さや身勝手さ、浅ましきなど、心の底に抑え込んでおくべき(抑え込んでおいてほしい)欲望や感情を剥き出しにしており、寅さんの、「それを言っちゃあ、お仕舞いよ。」という道徳観を大きく逸脱しているのではないのでしょうか。

人間としての狡さや卑しさを心の奥底に辛うじて抑え込み、「投影」の心理に苛立ちを覚えていた身は、とても立派なことを申し上げられません。

ですが、新しい「未」の年こそ、子どもの健やかな成長のために、大人は、子どもの時間を巻き込まず、子どもの時間に寄り添い、そして、言ってはならないことは断じて言わない大人、やってはならないことは決してやらない大人であってほしいと願わざるを得ません。

